

助成研究題目：大学生の感じる大学と社会についての調査

卒業論文題目：大学と大学生の関係性に関する研究-日本版 GPA 視点を探る-

調査の目的

文部科学省の『平成23年度学校基本調査』によれば、平成23年までに日本の大学数は、700校を超えており、短期大学まで含めると1,000校を超える。また、在学者数は、289万人以上にのぼる。これだけ多くの学生が、多くの大学に所属するのであれば、日本の大学生が「大学に期待するもの」は、さまざまであるだろう。「大学に期待するもの」がさまざまであることは、マーチン・トロウが提唱した「ユニバーサル型の大学」の特色である「極度の多様性」と仮定される。

しかし、この多様性を詳細に調査することは難しいだろう。そこで、今回の調査では、「学生が大学の授業やそこで取得する成績に対して何を期待しているのか」を調査することとした。なぜならば、大学生活においては、授業が学生生活の多くの時間を占めており、そこで得られる成績は、学生にとって重要なものであると推測されるからである。この考えは、社会学者ハワード・S・ベッカーらが、1968年にカンサス大学で行った調査結果を元として『成績を稼ぐ—大学生生活のアカデミックな場面』で示した「GPA 視点 Grade Point Average Perspective」に依拠するものである。つまり、本調査では、日本の大学生がもつ「GPA 視点」を調査することによって、間接的ではあるが、日本の大学における大学の「極度の多様性」を調査することが可能であると仮定している。

調査方法

今回、日本の大学生がもつ GPA 視点を明らかにするため、3つの調査を行った。それが、1) 高校生調査、2) 授業観察、3) 大学生調査である。1)、3)は質問紙を使用したアンケート調査で行い、2)は筆者の所属する大学の大学生向け授業へ参与観察を行なって調査した。なお、今回給付いただいた奨学金は、その全額を、大学生調査で回収した票（全655票、調査対象校数8校）を集計するにあたり、「プライバシーマーク」の認定を受けた社会調査会社にデータ入力を依頼する際に、その代金の一部として使用した。入力されたデータが手元に届いた後、社会統計ソフト SPSS 上にて、まず単数選択の回答について素集計結果を計算した。その後、各調査項目に合わせて、集計を行った。高校生調査においては、全ての回収票にナンバリングにて通し番号をふり、筆者と指導教員1名でデータ入力から素集計までを行った。

調査結果

調査の結果、現代の日本の大学生においても、ベッカーらが指摘した「GPA 視点」が一定程度以上保有されていること、現代日本に特徴的な性質を持っていることが仮定された。また、日本的な GPA 視点に関連すると推測される要因として、「授業以外の学生生

活」「教員に求められる属性」「学生における<主権者意識>と<幽閉者意識>」などの問題と GPA 視点との関連性を検討した。その結果、日本版 GPA 視点のいっそう詳細な特徴を仮定できた（図1）。そして、それらを日本版 GPA 視点とした。

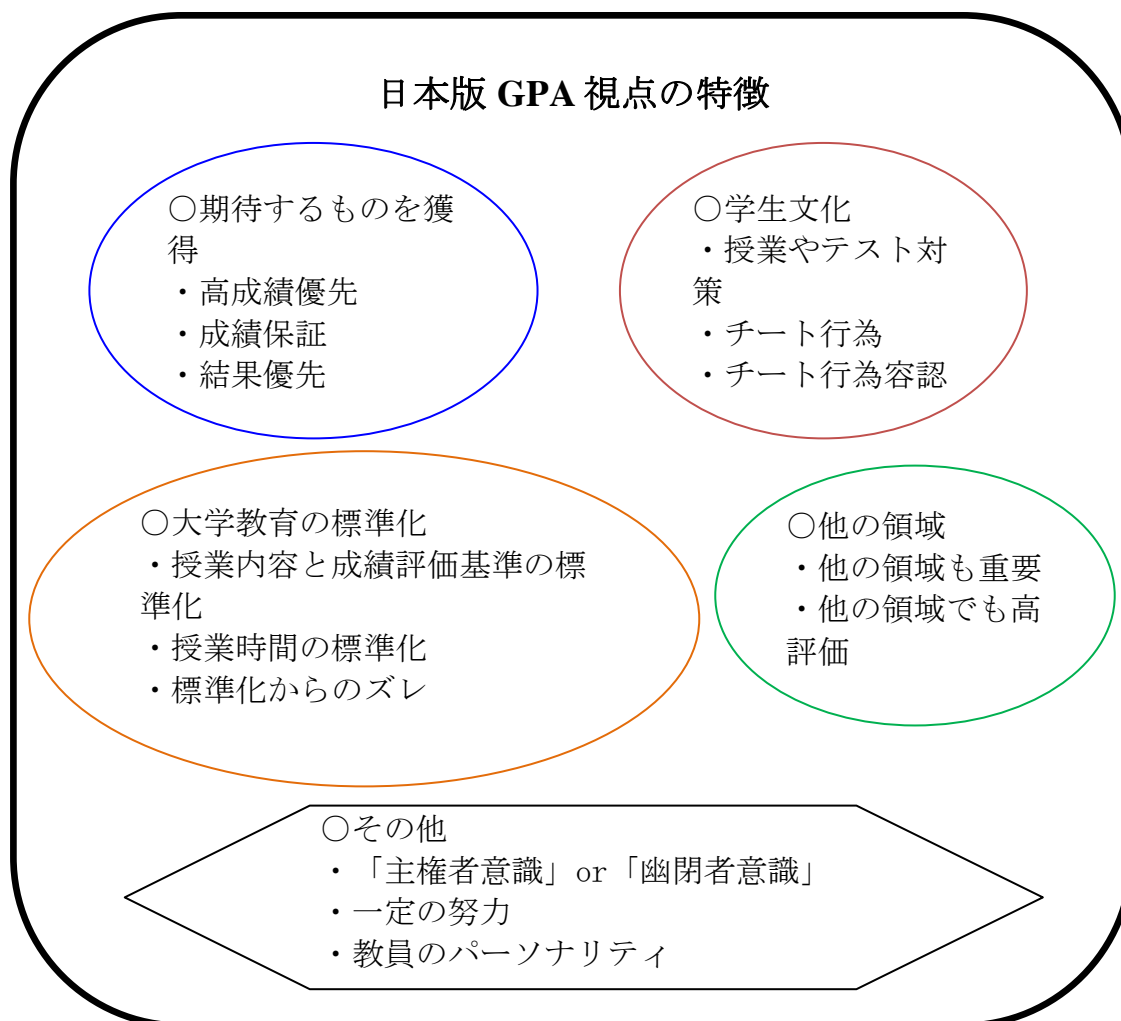


図1.日本版 GPA 視点の特徴

また、高校生と大学1年生の調査結果を比較することを通じて、GPA 視点、いつ獲得されるのか、高校生と大学生の間に GPA に対する意識に変化があるのか、等を検討した。その結果、高校生においても、GPA そのものについて意識をもつ、GPA 視点をもつ、等が推測されたが、本格的な GPA 視点は、大学への入学後に、形成されていくものであると仮定された。

さらに今回の大学生調査では、調査対象8大学のうち、実務的な資格や技能を取得させる2つの大学に焦点を合わせ、実務系高等教育におけるGPA視点の特徴を検討している。

また、それ以外の大学について、大学ブランドの強弱が、在籍学生のもつGPA視点の性質とどのように関連しているかを検討している。

その結果、実務系高等教育を行う大学では（以下、実務系大学）、ベッカーらが指摘した GPA 視点（以下、ベッカー版 GPA 視点）と今回の調査で仮定した日本版 GPA 視点の特徴が、はっきりと表れる結果となった。したがって、「大学生がもつ GPA 視点は、実務系大学では、いっそう強くなる」と仮定された。

また、大学ブランドの強弱が、在籍学生のもつ GPA 視点の性質とどのように関連しているかの検討では、大学ブランドが強い大学に在籍する学生ほど、ベッカー版 GPA 視点と日本版 GPA 視点のもつ特徴を巧みに併用しながら、行動していることが仮定された。また、在籍学生の大学ブランドが高くなるにつれて、「主権者意識」をもち、大学ブランドが弱くなるにつれて、「幽閉者意識」をもつようになると仮定された。したがって、「大学ブランドという特徴が、大学生の GPA 視点の使用傾向に影響する」と仮定された。

以上の検討を通して、この日本版 GPA 視点のいくつかの特徴と傾向を、大学が学生を「学生からの要求」として捉えるのではなく、「学生の特徴を測る指標」として大学が利用することで、学生の行動や志向を把握し、授業や大学制度を有意義なものにすることは可能であると考えられる。なぜならば、「大学生がもつ GPA 視点は、実務系大学では、いっそう強くなる」のであれば、授業や教育課程に対する学生の意識を測るために使用できると仮定されるからである。また、「大学ブランドという特徴が、大学生の GPA 視点の使用傾向に影響する」のであれば、そこに在籍する学生のもつ GPA 視点の使用傾向を参考にして、大学の教育課程を検討することが可能であると仮定される。

その一方で、1.「（成績ではない）結果」の多様性、2.さらに大規模な調査設計、3.明らかにならなかった傾向の再調査、といった課題もある。これらの課題を検討していくことで、日本版 GPA 視点の特徴や使用傾向をより詳細にし、その正確さを高めていきたい。

最後に、この度、私の調査に奨学金を給付して下さった、故川上宏先生とそのご家族と関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。